

# 鶴が丘だより

東京都町田市三輪緑山二丁目2133-1  
医療法人社団鶴水会鶴が丘ガーデンホスピタル  
院長 後藤晶子  
電話 044(988)3121(代)

鶴が丘だより六〇〇号記念

## 「五〇年の歴史①」

今月で鶴が丘だよりは六〇〇号を迎えました。今月と来月は、五〇年の歩みをお伝えします。

### ■黎明期（昭和四〇年～昭和四十六年）

永田実貴子（常務理事・薬剤師）

昭和三〇年代は民間精神病院建設ラッシュでした。精神医療は民間へと政策誘導され、昭和三十九年ライシヤワ―事件後さらに拍車がかかり次々と開院する中、昭和時代都内で最後に設立認可されたのが当院です。

開設者永田実男は、学生紛争により職場である東大精神科病床が無くならず、患者さんのための真の医療を求め、東京の南端の地に精

神医療の理想郷を目指しました。しかし比喩は精神医療への偏見は今に比喩はるかに厳しいものがあり、反対運動が近隣住民からは一年間の米粒の埃ピソドが語り継がれていきます。米は必要で大事なもの。しかし皇室ゆかりの公園「こどもの国」がある高貴な場であるこの地にはふさわしくないという事なので、徐々に意気投合し、最後には、その中のお一方が病院名の名付け親になって下さいました。「鶴川の気持のいい丘に」という意味で「鶴が丘病院」と命名されました。



協力者の中心は故神保真也先生、故渡仲惣之助氏、兄である故

有山英世医師でした。医局の上司であった神保先生は人事の支援を、渡仲さんは永田実男と同郷の焼津にある会社の会長職をしており、理念に共感し「こころ病む者のいいの場に」家族が安心して託せる場に「の想いを共有し、お忙しい中医療以外の殆どの相談を引き受けてくださいました。有山は九州大学卒業後、事情により若くして地元の開業医になりました。刃物のような切れ味と先見の明があり、昭和三〇年代には高額であった注射器ですが、「使い回しは危険」と自身の信念のもと使い捨てとし、その後地区周辺の子供には「型肝炎が一人も出ず、地元では「伝説の医師」と言われて下さる方もいました。その溢れる医療への情熱を、永田実男へ資金援助という形で託しました。皆様病院開設から昨年他界されるまで五〇年近く病院の理事として支援を頂きました。

### ■創成期（昭和四十六年～昭和六十四年）

若林紀子（精神保健福祉士・臨床心理士）

住民の理解を得て開院にこぎつけたのは昭和四十六年四月一日でした。「社会の真中の生き生きとした精神科病院を」心病む者のリハ

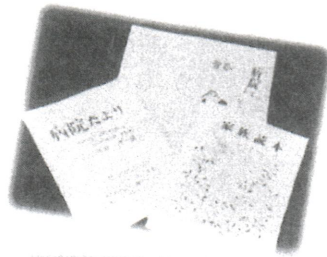
ビリーションを「家族的で開放的な医療を」といった故永田實男院長の熱い思いと高い志で出発しました。院長に共感し、何よりも温かいお人柄にひかれて、前任地の榛原病院からベテランの故並木恵子初代総婦長、関原靖ワーカーが共に上京しました。特に当時開院時から精神保健福祉士（PSW）がいる病院は殆どなく、大変珍しいものでした。

住民との約束で男女別の「閉鎖病棟」でスタートし、半年で満床になりました。閉鎖病棟でしたが明るく自由に開放的で、当初から「ハビリ活動」に取り組み、広い作業を行い、外勤作業（試験就労）へも出かけました。ボランティアや実習生も積極的に導入し、活気がありました。

ご家族と病院の間をつなぐ情報誌「病院だより」第一号を昭和四十六年十一月に発行し、毎月休まず手書きで作り、令和三年六〇号を迎えます。

昭和四十七年七月故中村舜二副院長を迎え、診療体制が整いました。患者様と対等に白衣を着た「長期入院の患者様を連れ」ドクター散歩」をされていました。

昭和四十九年十二月、念願のハビリ棟五〇床を増築しました。男女混合、開放病棟で、居室にゆとりを作るため二段ベッドを入れ、ラウンジは当時では珍しくピンク電話を設置し「サンフロア」と命名された。患者様とスタッフ全員での懇談会で病棟のルールを作り、病棟を閉鎖して全員で一泊キャンプへも出かけました。スタッフは皆二〇代で、看護師一名、他の六名は（恐らく日本で初めてですが）



東大から樋口輝彦現理事も非常勤でみえて、さらに充実しました。当時の精神衛生法では同意入院（今の医療保護入院）のみでしたが、自由入院（今の任意入院）を取り入れ、割の方が自由入院で「トステイ」と呼ばれる病院から通学や職場へ出勤される方もいました。

その後三病棟のうち二病棟の責任者がPSWの時代もありましたが、看護基準を取る時期にこの体制は終了しました。永田院長は、家族支援にもとても熱心で、全国精神障害者家族連合会の設立に深く関わり感謝状を頂きました。「ご家族から戴くのは医者冥利に尽きる」と大変喜び、院長室にずっと飾られています。院内でも昭和五〇年から家族教室を継続し、現在は後述する多様化した家族支援を行っています。

病院の近くへ「退院してアパート生活をしようになった方が訪問の始まりで、まだ診療報酬もない時代でした。また外来者の集い、青空の会（外来のセルフケアグループ）が定期的に行われるようになり、それがデイケアの土台になりました。作業レクも診療報酬制前から病棟ホールで行って次々と新しい事に取り組み、実践した時期。先進的にコマディルを多数活用し、多職種協働でチーム医療を実践して行きました。この精神が現在のプログラムの基礎となり文化となり、形を変えながら現在に継承されています。

：次号へつづく